

研究動向

青山学院女子短期大学60年史の基礎的研究

清水 康幸

本プロジェクトは2013年度より所員4人（清水康幸／谷本信也／菅野幸恵／山田美穂子）ならびに客員研究員1人（佐々木竜太・青山学院教育人間科学部助教）によって開始された。また編集補佐の2人（山崎奈々絵・聖徳大学／田中智子・立教大学）を加えて、日常的な活動を行っている。

本プロジェクトの研究目的は次の通りである。

「青山学院女子短期大学は1950年に開学し、すでに60余年の歴史を歩んでいる。本学の正史としては1975年に『青山学院女子短期大学の歩み』（通称25年史）を刊行し、2000年には資料集『50年の歩み』を刊行しているが、いわゆる正史は25年史のみである。本学は2012年に、これまでの6学科体制から現代教養学科と子ども学科の2学科体制に移行し、開学以来最大規模の改組を行った。このことは短期大学をめぐる情勢の変化への対応という側面を持ちつつ、同時に21世紀にふさわしい女性のための教養教育の実現に向けての新たな挑戦でもある。

本学の60余年の歩みは、そのまま日本の短期女子高等教育の歩みと重なる。また本学はキリスト教信仰にもとづく全国区の大都市型短期大学として、ユニークかつ独自の位置を占めてきた。本学の歴史については、本研究所プロジェクトにおいても何回かの調査研究が行われてきた。これらの蓄積をふまえ、60年史を編纂する時機が到来したと考えられる。本プロジェクトは、25年史、50年の歩み、さらに研究所プロジェクトの成果の上に立ち、60年史編纂の基礎作業を行うものである。」（プロジェクト「申請書」より）

このように、本プロジェクトは通常のそれと

は異なり、「60年史編纂」事業と表裏一体の関係をもって立ち上げられた点に大きな特徴を持つ。実際、プロジェクト発足に先立つ2013年3月には学長を委員長とする「青山学院女子短期大学60年史編纂委員会」が発足しており、4月以降はプロジェクト研究会と編纂委員会は合同で開催されてきた。すなわち、メンバーに一定の重なりがあるという事情もあるが、編纂委員会における方針討議とプロジェクトの研究作業とが共同作業として行なわれてきたということである。なお、60年史編纂事業は総合文化研究所創立25周年記念事業の一環という性格を持ち、その事業の発足については教授会および学院の管理委員会の承認を得た。さらに「60年史編纂」という事業名は2014年度からは「65年史編纂」と変更し、これも上記機関の承認を得て今日に至っている。

以下、発足後1年半にわたる本プロジェクトの活動経過につき、大きく研究会と講演会に分けて記していきたい。

〈研究会〉

- | | | |
|----------|---------|----------------------|
| 2013.5.1 | 第1回研究会 | 今後の研究方針 |
| 5.22 | 第2回研究会 | 「25年史」の検討 その1 |
| 6.19 | 第3回研究会 | 「25年史」の検討 その2 |
| 7.14 | 第4回研究会 | 年報17号、清水論文・鈴木直子論文の検討 |
| 10.9 | 第5回研究会 | 年報17号、菅野論文検討 |
| 10.30 | 第6回研究会、 | 年報17号、工藤論文、大野論文の検討 |
| 12.18 | 第7回研究会 | 65年史目次案の検討 |

- 2014.1.29 第8回研究会 同 (続き)
 2.19 第9回研究会 同 (続き)
 9.17 第10回研究会 資料集編纂方針について
 〈講演会〉
 2013.7.12 第1回 井上恵美子氏 (フェリス女学院教授)「フェリス女学院150年史資料集編纂の経験から」
 7.31 第2回 湯川次義氏 (早稲田大学教授)「大学史沿革史の記述内容について—『青山学院女子短期大学60年史』に期待するもの—」
 11.27 第3回 田島俊雄名誉教授「芸術学科創設の頃」
 2014.4.30 第4回 阿部幸子元学長「教員・学長時代の回想」
 5.21 第5回 前之園幸一郎元学長「学長時代の回想」
 7.9 第6回 前園主計名誉教授「将来計画委員会と総研設立の頃」

研究会は、前半の6回までは本学における過去の研究から学ぶことに重点をおいた。まずは「25年史」を再読し、本学前半期 (1950~75) の歴史を改めて確認することから始めた。ついで2007~08年度の総研プロジェクト「青山学院女子短期大学の歴史と現在」の成果 (年報17号、2010.3発行) および2000~01年度の総研プロジェクト「女子大学寮に関する心理学的・歴史的研究」 (年報10号、2002.12発行) の成果を検討した。年報17号のうち検討した論文は、清水康幸「青山学院女子短期大学の女子大化構想の変遷」、鈴木直子「『短大』イメージの形成と1980年代の林真理子」、菅野幸恵「『卒業生調査』報告—質問紙調査とグループインタビューから—」の3本であり、年報10号のうち検討したのは、工藤恵理子「寮生調査報告—寮生と非寮生との比較」、大野愛子「シオン寮在寮生の寮生活に関する意識」の2本である。これらの論文は、本学の歴史を考える上で避けて通れない重要な論点を整理したものであり、65年史編纂の

上でも大いに参照されるものとなろう。

研究会の後半は、「65年史」目次案および資料集の編纂方針について検討した。目次案については、特に「25年史」に書かれていない1970年代後半以降の章立てが論点となり、この検討プロセスで「60年史」から「65年史」へと変更することが確認された。すなわち、年史編纂の終期を、現代教養学科ならびに新専攻科の発足まで含めることとしたのである (この目次案は本学 HP の「青山学院女子短期大学65年史編纂事業」に掲載されている)。資料集の編纂方針については、「25年史」「50年史」や『青山学院大学50年史 資料編』所収の資料を参照しつつ、おおまかな方向性を確認した。新たな資料発掘の必要も明らかとなり、まだ確定には至っていない。資料整理作業も同時並行で進めており、内容については引き続き検討する予定である。

講演会については、まず他大学の年史編纂事業から学ぶため、井上恵美子氏 (フェリス女学院大学) および湯川次義氏 (早稲田大学) のお二人を招いた。井上氏にはフェリス女学院150年資料集編纂の経験をお話いただき、湯川氏からは膨大な大学沿革史の検討から浮かび上がる特徴や問題点を指摘していただいた。いずれも本学「65年史」編纂の上で有意義な助言となったばかりでなく、本学の取り組みに対する励ましと期待を寄せていただいた。続いて、本学の名誉教授や元学長から体験談をうかがう連続講演を続けてきた。田島俊雄先生からは芸術学科創設事情を中心に1980年代の本学の様子について資料を交え詳しくお話を伺うことができた。阿部幸子・前之園幸一郎の両先生には学長時代の体験を中心に、1970年代から2000年代にわたる在職中のさまざまなエピソードをうかがった。特に一般教員には知り得ない学院や大学との交渉など、興味深い論点を知ることもできた。前園主計先生にはご自身が委員長を務められた将来計画委員会や総合文化研究所の設立など、1980年代の動向を詳しくうかがった。このような講演会は、今後も機会をみて続けてい

きたいと考えている。

最後に、本プロジェクトの成果を年報にまとめるにあたり、参加メンバーの研究テーマを掲げておきたい（いずれも仮題）。

- ・清水康幸：2000年代における改組改革プロセスの整理と論点
- ・谷本信也：本学入試制度の変遷
- ・菅野幸恵：卒業生調査から見えてくること
- ・山田美穂子：宗教教育活動の変遷
- ・佐々木竜太：女子短大におけるアドバイザー制度の変遷と特徴